第三章　中君の物語　匂宮と六の君の婚儀

［第一段　匂宮と六の君の婚儀］

右の大殿には(みぎのおほいどのには、右大臣の源氏殿に於かれては)、*六条院の東の御殿磨きしつらひて(六姫の住まいである六条院夏の町の寝殿を磨き飾って)、限りなくよろづを整へて待ちきこえたまふに(この上なく立派に婚儀の万端整えて匂宮をお待ち申しなさるが)、*十六日の月やうやうさし上がるまで心もとなければ(十六夜の月が高く差し上っても新郎がお見えにならず落ち着かず)、いとしも御心に入らぬことにて(匂宮はたいして気の進まない結婚なので)、いかならむと、やすからず思ほして(どうしているのかと源氏殿は不安にお思いで)、案内したまへば(使いを出して、様子を確かめなさると)、　*「ろくでうのゐんのひんがしのおとど」は注に＜六の君は花散里の養女となって夏の御殿に住んでいる。＞とある。明らかな誤注だ。六姫は＜一条宮の養女＞となって夏の町に住んでいる(匂兵部卿巻二章六段)。光君逝去に伴って、「花散里と聞こえしは(花散里と申し上げた王家筋の御方は)、東の院をぞ、御処分所にて渡りたまひにける(二条東院を御遺贈分所領として賜わって移住なさいました)。」(匂兵部卿巻一章三段)とあった。　*「十六日の月(いさよひのつき)」は注に＜月の出が遅くなる。匂宮を待つ心に重ね合わせた設定。＞とある。「いさよふ」は＜ためらう＞で、「いさよひ」は＜ためらいがちにもたもたと出てくる月＞という言い方、とのこと。しかし、匂宮はもたつくどころか、未だに姿を見せないらしい。因みに、今年2013年の中秋の名月は9月19日でほぼ満月らしく、月の出は18：00くらいで、「十六夜」に当たるであろう9月20日の月の出は19：00くらいらしい。「やうやうさし上がるまで」となると、21：00〜23：00くらいなのだろうか。ほぼ満月だから晴れていれば明るい夜だろうが、裳着は深夜に行なわれたと聞いたし、嫁入りも深夜だったらしいが、婿入りも深夜らしい。妖しい風情はあるような気もするが、何か決定的に現代とは違う生活感があったように改めて思える。

「この夕つ方、内裏より出でたまひて、二条院になむおはしますなる(この夕方に御所を退出なさって、今は二条院にいらっしゃいます)」

と、人申す(と、使いの者は報告申します)。*思す人持たまへればと(二条院には匂宮は意中の人を囲っていらっしゃるからと)、心やましけれど(不愉快だったが)、*今宵過ぎむも人笑へなるべければ(今宵の婚儀が日延べに成るのも六姫の外聞に障るので)、御子の頭中将して聞こえたまへり(御子息の頭中将を使者に立てて匂宮にお出ましを願い申しなさいました)。　*「おぼすひと」は＜匂宮の意中の人＝対の御方＞だろうが、「持たまふ」の「持つ」は＜心に持つ＝心中に思う＞であると共に＜所有する、用いる＞でもあって、対の御方を＜囲い者＞に見做そうとする源氏殿の意向が示されている、と読んで置く。*「こよひすぎむ」は注に＜十六日の今宵が婚儀の日。世間周知のこと。＞とある。

「大空の月だに宿るわが宿に、待つ宵過ぎて見えぬ君かな」(和歌49-06)

「大空の　月さえ待つに　見えぬ君」(意訳49-06)

*注に＜夕霧から匂宮への贈歌。『花鳥余情』は「大空の月だに宿にいるものを雲のよそにも過ぐる君かな」(元良親王御集)を指摘。＞とある。元良親王の「大空の月だに宿にいるものを」は＜此処に月が明るく照らしているのに＞で＜御膳立てが整っているのに＞とか＜みんな祝福しているのに＞みたいな背景なのだろうか。だとすれば、「雲

のよそにも過ぐる君かな」は＜物陰に余所余所しく隠れているね、君は＞あたりか。まさか、祝言を前に「過ぐる」が＜死後時が経つ＞で＜雲より遠く煙が昇って去って行くあなただ＞という歌ではないのだろう。ま、同じ目出度い席の歌を引いたとして、源氏殿の「大空の月だに宿るわが宿に」は＜祝儀の御膳立て＞の上に＜輝く六姫が居る＞と主張しているように聞こえる。「宿るわが宿に」と野暮ったさを省みず、敢えて「宿」を重ねてまで「わが」と強調する言い方に相当な圧力を込めている気がするが、その高圧さに匂宮が気付かぬ筈はないだろう。「待つ宵過ぎて見えぬ君かな」に至っては、字数は踏んでいるが、およそ歌の情緒とは思えぬ事務的な催促文にさえ見える。

宮は(匂宮は)、「なかなか今なむとも見えじ(なかなか今から婿入りするとは御方に見せられない)、心苦し(気詰まりだ)」と思して、内裏におはしけるを(とお思いになって、御所にいらっしゃったのを)、御文聞こえたまへりけり、御返りやいかがありけむ(御所から二条院に御手紙を差し上げなさっては、その御返事に何と書かれていたのものか)、なほいとあはれに思されければ(やはり御方をとても悲しませると思われなさって)、*忍びて渡りたまへりけるなりけり(源氏殿には内緒で二条院に帰って来ていらっしゃったのです)。　*「しのびて」は注に＜匂宮が二条院に。当初は内裏から六条院へ直接出向く予定でいた。以下「--なりけり」という語り方。＞とある。ということは、そういう予定だと六条院の源氏殿に匂宮は伝えていたのだろう。だから、この「忍びて」は＜源氏殿の目から隠れて＞という意味かと思う。

らうたげなるありさまを(御方の従順そうな姿を)、見捨てて出づべき心地もせず(見捨てて出掛けられる気もせず)、いとほしければ(匂宮はとても気懸かりなので)、よろづに契り慰めて(いろいろと変わらぬ愛を誓い慰めて)、もろともに月を眺めておはするほどなりけり(一緒に月を眺めていらっしゃっていたのです)。

女君は(御方は女心に)、日ごろもよろづに思ふこと多かれど(此処最近は何かと思い悩むことが多かったが)、いかでけしきに出ださじと念じ返しつつ(決して顔色には出すまいと抑え返しながら)、つれなく覚ましたまふことなれば(平然としていらっしゃったので)、ことに聞きもとどめぬさまに、おほどかにもてなしておはするけしき(特に夫の別婚を気にして居ないように鷹揚に構えていらっしゃる態度が)、いとあはれなり(実に健気です)。

中将の参りたまへるを聞きたまひて(源中将が迎えに参上なさったのをお聞きになって)、さすがにかれもいとほしければ(さすがに源氏姫も放って置けないので)、出でたまはむとて(お出掛けなさるという事になって)、

「今、いと疾く参り来む(ちょっと出て、直ぐ帰ってまいります)。*一人月な見たまひそ(不吉といわれているので、一人で月見はなさいますな)。*心そらなればいと苦しき(あなたを置いて出かけても、心は虚ろなのでとても辛いのです)」　*「ひとりつきなみたまひそ」は注に＜『孟津抄』は「大方は月をもめでじこれぞこの積もれば人の老いとなるもの」（古今集雑上、八七九、在原業平）、『岷江入楚』は「独り寝のわびしきままに起きゐつつ月をあはれと忌みぞかねつる」（後撰集恋二、六八四、読人しらず）を指摘。また『岷江入楚』は「月明に対して往時を思ふこと莫かれ君が顔色を損じ君が年を減ぜん」（白氏文集巻十四、贈内）を指摘。＞とある。さて、ちょっと面倒だが、幾つかのウエブサイトを参照しつつ、これらの引用を見て見たい。で、先ず、古今集の歌は＜無闇に月を愛でるな、月日が積もれば早く老いる＞という冗談らしい。後撰集の歌は、「月をあはれといふは忌むなりと言ふ人のありければ」という詞書があるようで、其処に既に＜月を感傷的に

見るのは不吉だ＞と月夜の妖しさをいう言い伝えは述べられていて、歌の方は＜独り寝の寂しさに寝付けずに月見して居たら、確かに月見で感傷に耽るのは不吉と言われているように、離れている月日の長さが悲しく忌々しさが募って来た＞みたいな軽さのある恋歌なんじゃないのかな。「かぬ」は＜適わない＞ではなく＜兼ねる→別の物が誘発される＞と読んだ方が、「ぞ」の強調が楽しい。白居易の漢詩は、表題の「贈内」は＜家内に贈る歌＞とのことで、是も＜月見＞を＜歳月＞に掛けたオチになっているらしい。だからといって、匂宮は御方に軽口を言う場面でも無さそうなので、思い遣りを見せた、ということなのだろう。　*「心そらなれば」は注に＜『全書』は「たもとほり行箕の里に妹を置きて心空なり土は踏めども」（万葉集巻十一）を指摘。＞とある。幾つかの万葉集ウエブサイトによると、この引歌は万葉仮名で「徊俳 往箕之里尓 妹乎置而 心空在 土者踏鞆」と書かれているらしい。「たもとほる」は＜徘徊する→無駄に流浪する＞で、実際には役人が任地を転々とした事情かと思う。「往箕之里」は「行箕の里」と表記変換もあるが、読みは「ゆきみのさと」らしく、地名だろうが場所の特定は出来て居ないようだ。が、詠み手が地方を転々としたのなら、この「ゆきみのさと」は万葉期の都とは平城宮の隣接地の可能性が高い。「いもをおきて」は＜妻を残して＞。「心空なり土は踏めども」は、ほぼ現代語にも引き継がれていて＜地に足をつけて歩いていても心は此処に在らずと浮き足立って上の空だ＞。

と聞こえおきたまひて（と御方に申し置きなさって）、なほかたはらいたければ（それでも出て行く姿を見せるのは格好が付かないので）、*隠れの方より寝殿へ渡りたまふ（西の対から北側の渡殿を通って、使者の待つ寝殿に向かいなさいます）、　*「かくれのかた」は＜目立たない方の廊下＞で、この言い方で具体的に、是が南側の庭に面した透き渡し廊下ではなく、北側の渡り殿のことを示している、のだろう。屋根壁付きの廊下なら、月見の為に開けた妻戸からも姿は見えない。

御うしろでを見送るに（その宮の後姿を見送るのには）、ともかくも思はねど（直接に如何とは思わないが）、ただ*枕の浮きぬべき心地すれば（独り寝の寂しさに涙で枕も浮き流れるような気がして）、「心憂きものは人の心なりけり（世の中の辛さは人の心変わりだ）」と、我ながら思ひ知らる（と御方は、身を以て思い知らされます）。　*「枕の浮きぬ」は＜枕が浮き流れてしまう→悲しくて眠れない＞。注には＜『花鳥余情』は「涙川水まさればやしきたへの枕浮きて止まらざるらむ」（拾遺集雑恋、一二五八、読人しらず）、『源注拾遺』は「独り寝の床に溜れる涙には石の枕も浮きぬべらなり」（古今六帖五、枕）を指摘。＞とある。「しきたへ」は「敷妙」で、「白妙（しろたへ、白く美しい織物）」を寝具として敷き使うみたいな言い方らしい。「しきたへの」は「枕」を言い出す枕詞とのことだが、「妙」は＜妙なる美しさ＞であると同時に＜妖しさ、怪しさ、不思議さ＞を語感に持つので、そういう趣向は歌詠みに込められているのだろう。

［第二段　中君の不安な心境］

「幼きほどより心細くあはれなる身どもにて（幼い時から心細く貧しい姉妹の私たちで）、世の中を思ひとどめたるさまにもおはせざりし人一所を頼みきこえさせて（世の中に未練をお持ちでないような父宮ひとりを頼みと申し上げて）、さる山里に年経しかど（あの宇治の山里で何年も暮らしていて）、いつとなくつれづれにすごくありながら（取り立てて華やかな行事もなく漫然と地味な暮らしではありながら）、いとかく心にしみて世を憂きものとも思はざりしに（とてもこのようにしみじみと世の中を辛いものとは思わなかったが）、うち続き*あさましき御ことどもを思ひしほどは（打ち続いて父宮と姉君の不幸に見舞われた時は）、世にまたとまりて片時経べくもおぼえず（私だけがこれ以上生き延びようとも思われず）、恋しく悲しきことのたぐひあらじと思ひしを（是ほど恋しく悲しいことは他に無いだろうと思ったものだが）、命長くて今までもながらふれ

ば(今まで生き延びてみれば)、*人の思ひたりしほどよりは(周囲の者が思っていたよりは)、*人にもなるやうなるありさまを(人並みの貴族生活を)、長かるべきこととは思はねど(長く続くこととは思えないが)、見る限りは憎げなき御心ばへもてなしなるに(直接会っている限りは宮は優しい御愛情での応接なので)、やうやう思ふこと薄らぎてありつるを(いつ終わるのだろうという不安も次第に薄らいで来ていたが)、この折ふしの身の憂さ*はた(この度の自分の立場の辛さというものを思えば)、言はむ方なく(やはり間違いなく)、限りとおぼゆるわざなりけり(是が最後なのだと知るべきものなのだろう)。　*「あさましき御ことども」は＜変わり果てた御不幸＞で＜父宮と姉君の死＞のこと、らしい。「思ふ」は＜思う＝悲しむ＞と訳文にあるが、原義は＜重く受け止める＞という語だろうから、「御ことどもを思ひしほど」は＜不幸を重く受け止めた時＝不幸に見舞われた時＞に襲われた様々な思いかとおもわれ、むしろ＜悲しみ＞と一括りにしない方が語感に近い気がする。　*「人の思ひたりし」は敬語遣いが無いので、この「人」は世間かも知れないが、妹君は隠棲に近かったので＜周囲の人＞あたりになりそうだ。　*「人にもなるやうなるありさま」は注に＜皇族として人並みの生活。匂宮の夫人として二条院に迎えられた現在の境遇。＞とある。　*「はた」は、改めて事物を客観的に見直してみると＜ひょっとして、やはり、もしや＞と伏線に思い当たって＜ハッと気付く＞みたいな語感。だから、「言はむ方なく」は＜他に言いようも無く→やはり間違いなく＞と、その気付きを検証する心理なのだろう。

ひたすら*世になくなりたまひにし人びとよりは(本当に死んでしまいなさった故宮や故君よりは)、さりともこれは(終わりと言っても宮様は)、*時々もなどかは(時々もどうして逢えない事があろう)、とも思ふべきを(とも思えるが)、今宵かく見捨てて出でたまふつらさ(今宵このように私を見捨ててお出掛けなさる情けなさに)、来し方行く先、皆かき乱り(過去も未来も皆入り乱れて、冷静な判断が出来ず)心細くいみじきが(不安で堪らないというのが)、わが心ながら思ひやる方なく(我ながらどうにもならず)、心憂くもあるかな(辛くてならない)。*おのづからながらへば(長い目で見るしかないのか)」　*「世になくなりたまひにし人びと」は、敬語遣いからして＜父宮と姉君＞なのだろう。　*「時々もなどかは」は注に＜反語表現。下に「逢へざらむ」などの語句が省略。逢えないことはない、の意。＞とある。　*「おのづからながらへば」は注に＜『集成』は「そのうちまた、匂宮との間もうまくゆくようになるかもしれない、という気持」と注す。＞とある。ただ、此処では楽観ではなく諦観だ。

など慰めむことを思ふに(などと気を鎮めようと思うが)、さらに*姨捨山の月澄み昇りて(引き続き明るい月夜の山並みを眺めては、自分が捨てられる老妻と思えば、古歌にある「姨捨山に照る月」の悲しさが思われて)、夜更くるままによろづ思ひ乱れたまふ(夜が更けるままにいろいろと思い乱れなさいます)。　*「をばすてやまのつき」は注に＜『源氏釈』は「我が心なぐさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（古今集雑上、八七八、読人しらず）を指摘。＞とある。この歌は大和物語 156 段の姨捨伝説に仕立てられていて、大辞泉の「姨捨山」項目にも＜長野県千曲(ちくま)市にある冠着(かむりき)山の別名。標高 1252 メートル。古くから「田毎(たごと)の月」とよばれる月見の名所。更級(さらしな)に住む男が、山に捨てた親代わりの伯母を、明月の輝きに恥じて、翌朝には連れ戻しに行ったという、姨捨て伝説で知られる。［歌枕］＞とある。因みに、「田毎の月」は＜長野県更級郡冠着山のふもとの、小さな水田の一つ一つに映る月。名月として知られる。たごとづき。＞とある。だから、「更級や」と言えば如何にも信濃の地名で、月見と言えば名所の歌枕でもある「姨捨山」に繋げる枕詞になるという語り調子の良さだ。が、姨捨伝説はこの歌とは別に古くからあった風習や、それに基づく言い伝えだろうし、この歌はこの歌で、独りで月見する侘しさが＜更に更に＞増してくるという一般情緒を、月見の名所として知られる姨捨山を詠み込んで風流ぶっている、という味わいなのだろう。即ち、歌だけを独立に取り出せば、この「さらしなや」こそが急所だ。「さらしなや」と言えば、「さらしな」が信濃路の更科のこと

のように聞こえるが、「さらしな」は＜更に＞という強調副詞を更に強調した言い方なのだろう。即ち、「し」は形態助動詞「き」の連体形で重複強調の副助詞であり、「な」は「に」に準ずる副詞句や形容句に語用する格助詞と見れば、「さらしなや」は＜尚更の事に＞と言っている。何に対して＜尚更＞かと言えば、ただでさえ悲しみに寝付けないというのに、忌むべき月を独りで見ては、気が静まるどころか＜尚更に滅入る＞というわけだ。

松風の吹き来る音も(二条院の庭の松木を通り来る風の音も)、荒ましかりし山おろしに思ひ比ぶれば(荒々しい宇治の山おろしに思い比べれば)、いとのどかになつかしく(とても長閑に柔らかく)、めやすき御住まひなれど(穏やかな住まいだが)、今宵はさもおぼえず(今宵はそうも思えず)、*椎の葉の音には劣りて思ほゆ(騒々しい椎の葉を揺する音以上に胸騒ぎする松風です)。 *「しひのはのおと」は注に＜『集成』は「椎は、歌の世界で、山里暮しの象徴的景物だったと思われるが、古い歌の例に逢着しない」と注す。＞とある。

「山里の松の蔭にも、かくばかり身にしむ秋の風はなかりき」(和歌 49-07)

「なによりも 身にしむ風は 人の飽き」(意訳 49-07)

*注に＜中君の独詠歌。「秋」に「飽き」を響かせる。『完訳』は「秋風に寄せる絶望的な心の歌」と注す。＞とある。先にも、御方は「心憂きものは人の心なりけり」(一段)と嘆いていた。確かに、暖を取っても厚着をしても心の穴は埋まらない。が、火を焚いて湯を飲んで暖かい布団に包まれば、一息は吐ける。其処に絶妙なバカが出れば、取り敢えずは笑える。情熱が無ければ話は始まらないし、人は話がしたくて生きているのかも知れないが、話なんか何もなくても、先ずは生きて居ないと何も始まらない。ただ、「かくばかり」に洒落語用が無さそうなので、歌の文句にしては妙な唐突感がある。

来し方忘れにけるにやあらむ(こう詠歌する御方は、まるで宇治でのわびしい暮らしを忘れたかのようです)。

老い人どもなど(古女房たちは)、

「今は、入らせたまひね(もう、母屋へお入りなさいませ)。月見るは忌みはべるものを(月を見るのは不吉と言いますから)。あさましく(何とまあ)、はかなき御くだものをだに御覧じ入れねば(ちょっとした御菓子さえ召し上がらないのでは)、いかにならせたまはむと(何か御不調なのかと)、あな、*見苦しや(まあ、心配です)。*ゆゆしう思ひ出でらるることもはべるを(以前に悪阻かと思い出されることもありましたので)、いとこそわりなく(そうであれば大変です)」 *「見苦し」は＜見た目が悪い。みっともない。見るに耐えない。＞でもあるが、他に＜見る事が出来難い。見るのが辛い。見たくない。＞という語用もあるらしい。此処では後者で＜見るのが辛い←案じられる＞と取らないと御方への言い方に成らない気がする。 *「ゆゆし」は＜不吉だ。忌まわしい。＞という語用が多いが、原義は＜神聖で畏れ多い。神業だ。＞ということらしく、だから＜恐ろしい→避けるべき＞みたいに使われる語なのだろう。つまり、総じて＜取り扱いに注意を要する非日常的な事柄＞に対する形容修辞で、本来は慶事にも使うということで、となると二章二段に「この五月ばかりより例ならぬさまに悩ましくしたまふこともありけり」と妊娠悪阻の兆候らしき記事があり、今は八月十六日なので「思ひ出でらるること」とは、その五月の悪阻かと思われる。因みに、悪阻は妊娠5週くらいから始まって16週くらいには治まると関連サイトにあった。胎盤形成期の体調変化らしい。五月に妊娠五週目だったとすれば妊娠二ヶ月目で、この八月は妊娠五ヶ月目くらいとなり、出産は来年一月か二月あたりだろ

うか。二章二段では、妊娠の話題はうやむやなままに今の八月の話題に転じてしまっていて、ということは、もう妊娠五ヶ月目だというのに、まだ女房たちも気付いていないという設定のままらしい。しかし、御方自身は体調の変化を実感していて、その身重の体が「かくばかり身にしむ」と詠ませたのかも知れない。

とうち嘆きて(と不安げで)、

「いで、この御ことよ(さあ、今日の宮様のご結婚のことですよ)。さりとも(そうは言っても)、かうておろかには(このまま御方を疎かには)、よもなり果てさせたまはじ(よもやお見捨てなさらないでしょう)。さいへど(何と言っても)、もとの心ざし深く思ひそめつる仲は(最初に情熱深く恋愛した仲は)、名残なからぬものぞ(忘れられないものですから)」

など言ひあへるも(などと話し合っているのも)、さまざまに聞きにくく(いろいろと聞くに堪えず)、「今は、いかにもいかにもかけて言はざらなむ(今はこの件については何も女房たちと話さずにいよう)、ただにこそ見め(黙ってことの成り行きを見ていよう)」と思さるるは(と御方がお思いになるのは)、人には言はせじ(他人に口を挿ませず)、我一人怨みきこえむとにやあらむ(自分こそが宮に直接不平を申し上げようという当事者としての意地なのでしょうか)。

「いでや(それに引き換え)、中納言殿の、さばかりあはれなる御心深さを(中納言殿の何と誠意ある情け深さよ)」など、そのかみの人びとは言ひあはせて(などと昔からの事情を知る女房たちは同感しあって)、「人の御宿世のあやしかりけることよ(人の御縁の不思議さよ)」と言ひあへり(と言い合っていました)。

[第三段　匂宮、六の君に後朝の文を書く]

宮は、いと心苦しく思しながら(匂宮は御方の手前は、とても気詰まりにお思いになりながらも)、今めかしき御心は(後れを嫌う御性格から)、いかでめでたきさまに待ち思はれむと(せいぜい立派な婿に迎え思われたいと)、心懸想して(気取って)、えならず薫きしめたまへる御けはひ(言うに言われぬ甘い香を焚き染めなさった新郎ぶりは)、言はむ方なし(申し分ない素晴らしさでした)。待ちつけきこえたまへる*所のありさまも(婿をお待ち申しなさっていた新婦の花嫁ぶりも)、いとをかしかりけり(とても見事なのでした)。　*「ところ」は床入り場所の六条院東殿であり、その正面の室礼であり、帳台であり、その前の部屋の調度品であり、新婦の座であり、そこに座している新婦である。「いとをかしかりけり」は場所を修辞する地文として訳文されているが、この「かりけり」は匂宮の視点による印象を客観表現したものだろう。「をかしかりけり」は「をかしくありけり」の短縮形で、単に状況描写なら「をかしけり」という状態の助動詞語用で済むところを、「しくあり(如く在り)」という印象の副詞語用を述べる事で画面には一気に六姫が大接写される。この語り手の呼吸が、以下の文を突如として閨の場面に誘う。

*人のほど(新婦の身体つきは)、ささやかにあえかになどはあらで(小柄で細身などということはなくて)、よきほどになりあひたる心地したまへるを(良い肉付きの抱き心地でいらっしゃるのを)、　*「人のほど」は注に＜地の文。匂宮がまだ知らない六の君の様をあらかじめ語る。＞とある。信じられない誤注だ。別に取り上げずに無視しようかと思ったが、「心地したまへる」とまで明示している珍しいほど具体的な肉欲表現を邪魔するのは強い悪意を感じるので、敢えてノートする。この文は、匂宮が「まだ知らない」のではなくて＜今正に味わっている＞「六の君の様」を、その匂宮の印象で語っているものだ。注が間違っていても、私のよう

な現代の読者でも普通に読めるような、然したる難文でもないとも思うが、正にこの「人のほど」を＜身体つき＞と読む所が、この話運びからして匂宮が実際に六姫を抱いた印象を示す勘所に思え、この点については左様に訳文にあるので助かるが、であれば尚更、何故斯くも変な注釈を加えるのか真に不可解だ。

「*いかならむ(いやしかし、どんなものかな)。*ものものしく*あざやぎて(お嬢様育ちだから、取り澄まして我が強く)、心ばへもたをやかなる方はなく(考え方も型通りでしなやかさの無い)、ものほこりかになどやあらむ(高慢ちきな女じゃないのかな)。さらばこそ、うたてあるべけれ(だったら御免だね)」　*「いかならむ」は注に＜以下「うたてあるべけれ」まで、匂宮の心中。＞とある。が、何も、此処で匂宮は初めて六姫の印象を得たのではない。匂宮が既に触れて実感した六姫の身体つきは、小柄ではないが痩せ気味の宇治姫とは違って、女の質感が十分あった。が、女の質感については多くの召し人を抱いて来た匂宮は、それぞれの味わいを知っていて、興味はあっても、それに溺れることはない。この点が、私のような凡人とは違い、羨ましいところだが、個別事情に捉われない高い判断力が求められる貴人には、そういう環境は必要かも知れない。尤も、凡人としては、そういう世界の男や女に本当の自由は無いと、どうしても思いたいところだが。ともあれ、この場面は匂宮が六姫と直に対面して、その事自体が正に御目見えの大緊張だが、先ずはじっくり視姦して、今日までに床入りの御膳立ては済んでいるので、そのまま手を引いて帳台に入り、姫の帯を解いて肌を合わせながら、今まで交わした手紙での歌などを肴にして耳元で語り掛ける、という運びでの、その応対ぶりで匂宮が六姫の性格を探ろうとしている、その展開での心中文だ。　*「ものものし」は＜重々しい→格式張る、形式張る、権威主義的だ→もったいぶる、親しみの無い＞。　*「あざやぐ」は＜あざやかめく→明瞭だ、はっきりしている、ハキハキしている→気が強い、押しが強い、我が強い、我を張る＞。

などは思せど(などと宮はお考えになるが)、さやなる御けはひにはあらぬにや(六姫はそういう御人柄ではなかったらしく)、*御心ざしおろかなるべくも思されざりけり(宮は情交を御座なりで済まそうとはお思いなさらなかったのです)。秋の夜なれど(長いと言う秋の夜だが)、更けにしかばにや(夜更けの床入りだったからか)、*ほどなく明けぬ(直ぐに明けてしまいました)。*「おおんこころざし」は＜宮の情熱＞みたいな言い方だが、この言い方がこの艶笑譚で指し示すところは＜屹立した男根＞であり＜その女陰への挿入＞であり＜激しい突き上げ＞であり＜射精＞である。　*「ほどなく明けぬ」は情事の充実ぶりを示す。こういう言い方をすると知るべきだ。

帰りたまひても(匂宮は二条院にお帰りになっても)、対へはふともえ渡りたまはず(西の対へ直ぐには向かう事がお出来にならず)、しばし大殿籠もりて(少しお休みになって)、起きてぞ御文書きたまふ(起きてから六姫に後朝の御手紙をお書きになります)。

「御けしきけしうはあらぬなめり(宮のご様子では、初夜は悪く無かったようですね)」

と、御前なる人びとつきじろふ(と側近女房たちは小声で噂し合います)。

「対の御方こそ心苦しけれ(対の御方が気の毒です)。*天下にあまねき御心なりとも(いくら公明に公平に注がれる宮の御愛情と言えども)、おのづからけおさるることもありなむかし(源氏右大臣の御権勢には自ずから対の御方は圧倒される事になるんでしょうから)」　*「てんか」は、世界であり、国であり、京都でもあるだろうが、此処では「天下に」で＜公明に＞という副詞語用なのだろう。「あまねき」は形容詞「遍し(あまねし、広く行き届いている)」の連体形とのこと。現代語では「遍く(広く及んだ)」という副詞語

用しか使われないので、「遍き」という語感は馴染めないので分かり難いが、現にこのように使われているのだから、改めて「遍し」の形容詞語用を考えてみる。と、副詞は事態の客観傾向を修辞するが、形容詞は修辞する能動主体と受動客体とで、動詞の自動詞と他動詞の違いと同じほどの別視点での語用があるのではないか。であれば、この「遍き御心」も「みこころ」が誰の気持かで＜広く及ぼしている（お気持ち）＞なのか＜広く及ぼされている（お気持ち）＞なのかが変わってくる。で、此処での「御心」は匂宮なので＜及ぼしている＞という言い方になっている、のだろう。事態として＜及んでいる＞事に変わりは無いので、副詞語用している限りは気にする必要もないが、形容詞語用の言い換えには注意が要るのかも知れない。

など、ただにしもあらず、*皆馴れ仕うまつりたる人びとなれば（などと、在り来たりの付き合いではなく、宮付きも御方付きも誰もが親しく仕え申していた二条院の女房たち同士だったので）、やすからずうち言ふどももありて（心穏やかならず言い出す者も居て）、すべて、なほねたげなるわざにぞありける（総じて、やはり不満そうなのでした）。　*「皆馴れ仕うまつりたる人びとなれば」は注に＜匂宮付きの女房が中君付きの女房と仲好くしているということ。＞とある。

「御返りも、こなたにてこそは（六姫からの御返書も、この自室で待ちたい）」と思せど（と匂宮はお思いになったが）、「夜のほどおぼつかなさも（昨夜の御方の不安も）、常の隔てよりはいかが（いつもの留守よりはどんなに、気を揉んだことだろう）」と、心苦しければ（と負い目に感じて）、急ぎ渡りたまふ（急いで西の対に向かいなさいます）。

*寝くたれの御容貌（上気気味に寝乱れた宮の御表情は）、いとめでたく見所ありて（実に晴れ晴れと生気溢れて）、入りたまへるに（御部屋に入っていらっしゃるのに）、臥したるもうたてあれば（臥しているのも情けないので）、すこし起き上がりておはするに（少し起き上がっていらっしゃった御方の）、*うち赤みたまへる顔の匂ひなど（泣き腫らしたか、赤味がかっていらっしゃる目元の具合など）、今朝しもことにをかしげさまさりて見えたまふに（今朝は殊に風情があるようにお見えなので）、あいなく涙ぐまれて（宮は訳も無く涙ぐまれて）、しばしうちまもりきこえたまふを（暫くじっと見つめていらっしゃるのを）、恥づかしく思してうつ臥したまへる（恥ずかしく思ってうつむきなさる御方の）、髪のかかり、髪ざしなど、なほいとありがたげなり（髪の形や色艶などは、やはり実に得難いものです）。　*「ねくたる」は＜寝乱れる＞と古語辞典にある。注には＜『完訳』は「匂宮の。六の君との共寝を思わせる表現。優艶な姿である」と注す。＞とある。充実した情交で精子が搾り出され代謝が活性化してホルモン分泌が盛んになり男臭さが増す、みたいなことだろうか。　*「うち赤みたまへる顔の匂ひは注に＜『集成』は「昨夜泣き明かした名残であろう」と注す。＞とある。

宮も、なまはしたなきに（宮も何処かきまり悪さに）、*こまやかなることなどは、ふともえ言ひ出でたまはぬ面隠しにや（優しい言葉などは気楽に仰れないという照れ隠しからか）、　*「こまやかなること」は注に＜愛情のこもったやさしい言葉。＞とある。

「などかくのみ悩ましげなる御けしきならむ（どうしてこうも、あなたは不調の御様子なのでしょう）。暑きほどのこととか、のたまひしかば（暑さの所為とか仰っていたので）、いつしかと涼しきほど*待ち出でたるも（早く涼しくならないかとこの季節を待っていたのに）、なほはればれしからぬは、見苦しきわざかな（まだ良くならないのは困ったことです）。　*「待ち出づ」は＜出て来るのを待つ。待ち受けて会う。＞と大辞泉にある。此処では、今の秋になるのを待っていて、やっと秋になった、

という言い方なのだろう。注には＜今日は八月十七日。中秋も半ばを過ぎたころ。依然として暑い日が続いているという。＞とあるが、本文でもそうは言っていないと思うし、実際に旧暦八月十七日は今の九月末の事であってみれば、さすがに秋風も立つことだろう。ただ、やはり御方の妊娠はまだ宮には知られていないらしい。今はまだ、妊娠四、五ヶ月くらいなので、人によっては腹ぼてが全く目立たないのだろう。

さまざまにせさすることも(いろいろと平癒祈願の祈祷をさせても)、あやしく験なき心地こそすれ(不思議と効験が無い気がする)。さはありとも、修法はまた延べてこそはよからめ(それでも、祈祷は続ければ良い)。験あらむ僧もがな(法力のある僧は居ないものか)。*なにがし僧都をぞ(話に聞いたあの高名な僧都を)、夜居にさぶらはすべかりける(夜居に務めさせれば良かった)」　*「なにがしそうず」は注に＜『集成』は「実名を言ったのだが、それをあらわに文章化しない書き方」と注す。＞とある。

など、やうなるまめごとをのたまへば(などというような生活事情を話題になさるので)、かかる方にも言よきは(こういう時にも無難な話をするのには)、心づきなくおぼえたまへど(核心をはぐらかす態度に見えて、御方は気に入らなかったが)、むげにいらへきこえざらむも例ならねば(無視してお答え申さないのも、如何にも意地を張っているようで変なので)、

「昔も、人に似ぬありさまにて(以前も私は人と違って)、かやうなる折はありしかど(こうした不調の時がありましたが)、おのづからいとよくおこたるものを(自然に治りましたので)」

とのたまへば(と仰ると)、

「*いとよくこそ、さはやかなれ(ずいぶん、あっさりしたもんだ)」　*注に＜中君の詞。『集成』は「冗談にまぎらわす気持」。『完訳』は「病気をも心配せず私をも嫉妬せず、さわやかな性格と冷かす」と注す。＞とある。

とうち笑ひて(と宮はお笑いになって)、「なつかしく愛敬づきたる方は、これに並ぶ人はあらじかし(親しみがあって可愛らしい点ではこの人が一番だ)」とは思ひながら、なほまた(とは思いながら、それでも他に)、とくゆかしき方の心焦られも立ち添ひたまへるは(新婦に早く逢いたいと逸る心が同時に有るのは)、御心ざしおろかにもあらぬなめりかし(六姫との情事が決して疎かなのもではなかったからのようです)。

[第四段　匂宮、中君を慰める]

されど(しかし宮は)、見たまふほどは変はるけぢめもなきにや(御方とお会いになっている間は以前と違ったところもないのか)、後の世まで誓ひ頼めたまふことどもの尽きせぬを聞くにつけても(共に来世までと変わらぬ愛を誓い願いなさる言葉の尽きないのを聞くにつけても)、「げに(今回のように)、この世は短かめる命待つ間も(この世の短い一生の間にも)、つらき御心に*見えぬべければ(辛い宮の移り気を見てしまわなければならないとしても)、*後の契りや違はぬこともあらむ(来世の約束だけは違わないこともあるだろう)」と思ふにこそ(と思えるので)、なほこりずまに(まだ性懲りも無く)、またも*頼まれぬべけれとて(改めて頼りにせざるを得ないだろうという事で)、いみじく*念ずべかめれど(頼り無い立場を必死で堪えていたようだが)、え忍

びあへぬにや(とても耐え切れなかったか)、今日は泣きたまひぬ(御方は今日は泣いてしまいなさいました)。　*「見えぬべければ」はとても分かり難い言い方だ。「見えぬ」は「見ゆ(見える)」の連用形に完了の自動詞「ぬ」が付いた終止形の言い方で＜見えてしまう＞。「べけれ」は当然・必然意の助動詞「べし」の已然形と文法整理されているらしいが、「べけれ」は形容詞「べし」の連用形「べく」に形態認識の助動詞「あり」が付いた「べくあり」の已然形「べくあれ」の短縮音便という説明も成立するのではないか。であれば、「べけれ」は＜～である場合＞ではなく＜～でなければならないとした場合＞という言い方になる、のだろう。接続助詞「ば」は已然形に付いて、順接の＜～の場合には、～の場合なら＞とも、逆接の＜～の場合でも、～の場合にも＞とも構文するらしく、此処では文意からして逆接らしい。　*「のちのちぎりや」の「や」は疑問や反語の係助詞ではなく、「見えぬべければ」という条件項を受けて、「後の契り」を個別強調する間投助詞で＜これだけは＞と目的語を対象限定しているのだろう。そう取らないと全体の文意が成立しない。　*「頼まれぬべけれとて」は分かり難い。「頼まれぬ」は、「頼む(頼る)」の未然形「頼ま」に、受身の助動詞「る」が付いた「頼まる(頼むようになる)」という言い方の連用形「頼まれ」に、完了の助動詞「ぬ」が付いた＜頼むようになってしまう→頼まざるを得ない＞という言い方の終止形。「べけれ」は＜～でなければならないとした場合＞と前に見たが、是は已然形だろうか。已然形は係助詞「こそ」を受けた係り結び文型では文末を成すが、それはその活用語が説明や強調の文意を示していて、下に続く形式的な自明の文末終止を省いているのであって、此処での言い切りはむしろ命令形語用なのではないか。即ち、この「べし」は予測意であって「べけれ」は＜～となる(に違いない)だろう＞という言い方。「とて」は＜～ということで＞。　*「念ず」は＜祈る、願う＞でもあるが＜堪える、我慢する＞でもある。此処では＜辛い立場に涙を堪える＞ということらしい。「べかめり」は、予測の助動詞「べし」の連体形「べかる」に推察の助動詞「めり」が付いた「べかるめり(～のようであるらしい)」の音便形「べかんめり」の撥音「ん」の無表記語、と古語辞典にある。

日ごろも(この数日も)、「いかでかう思ひけりと見えたてまつらじ(決してこう悲しんでいるとお見せ申すまい)」と、よろづに紛らはしつるを(と御方は、いろいろに表情を誤魔化して隠して来ていたが)、さまざまに思ひ集むることし多かれば(さまざまに考えられる不安が募って)、さのみもえもて隠されぬにや(そのようには隠していられなくなったか)、こぼれそめては(涙がこぼれ出したら)、えとみにもためらはぬを(直ぐには止められないのを)、いと恥づかしくわびしと思ひて(とても極まり悪く惨めに思って)、いたく背きたまへば(すっかり顔を隠していらっしゃると)、しひてひき向けたまひつつ(宮は強いて振り向かせなさって)、

「聞こゆるままに(私が変わらぬ愛を誓い申し上げる、そのままに)、あはれなる御ありさまと見つるを(愛しい御方と思っているのに)、なほ隔てたる御心こそ*ありけれな(やはりあなたは以前から私の愛を疑う気持ちがあったのですね)。さらずは(さもなくば)、夜のほどに思し変はりにたるか(昨夜の内に変わったのですか)」　*「ありけり」は＜以前からずっとそうだった＞。

とて、わが御袖して涙を拭ひたまへば(と言って、御自分の袖で御方の涙を拭いなさると)、

「夜の間の心変はりこそ(昨夜の内の心変わりとは)、のたまふにつけて(そう仰るあなたの方こそ)、推し量られはべりぬれ(心当たりがお有りかと存じられます)」

とて、すこしほほ笑みぬ(と御方は少し微笑みました)。

「げに、あが君や(実に君という人は)、幼なの御もの言ひやな(子供じみた言をいう)。されどまことには、心に隈のなければ、いと心やすし(でも私には本当にやましい所が無いので実に気楽だ)。いみじくことわりして聞こゆとも(どんなに理屈を言い聞かせても)、いとしるかるべきわざぞ(私の愛に嘘があるなら、それはバレるものですからね)。むげに世のことわりを知りたまはぬこそ(しかし私の立場では右大臣を無視できないので、あなたはまるで大人の付き合いというものをご存じないから)、らうたきものからわりなけれ(無邪気なものの、困ります)。

よし、わが身になしても思ひめぐらしたまへ(例えば、自分の身になって考えて御覧なさい)。身を心ともせぬありさまなり(私も思うに任せない立場なのです)。もし、思ふやうなる世もあらば(もし思いのままの世になったなら)、人にまさりける心ざしのほど(あなたを一番大事に思っている事を)、知らせたてまつるべき*ひとふしなむある(お知らせ申せる一事が有ります)。たはやすく言出づべきことにも*あらねば(軽々しく口に出来る事では無いが)、*命のみこそ(命に代えて)」　*「一節」は注に＜『集成』は「立坊ののち、即位の暁には、立后のこともあろう、の意」と注す。＞とある。　*「あらねば」は、順接の＜～ではないので＞ではなく、逆接の＜～ではないが＞という言い方、らしい。　*「命のみこそ」の「いのち」は話者たる匂宮の＜命＞だが、何も＜自分が即位する運命なら＞とか＜運だけが頼り＞とか、そんな説得力の無い事を態々この場面で言う筈も無い。この「のみ」の副詞語用は限定意ではなく、その個別対象を特定意で＜それ自体そのもの＞と強調認識していて、「こそ」は説得文型の係助詞なので、「命のみこそ」は＜命そのものに代えて誓うから＞という言い方なのだろう。いや、口から出任せの閨物語だろうが、それだけに、宮がこう言った後に現れる間抜けな従者が笑える。

などのたまふほどに(などと宮が仰っている所に)、かしこにたてまつれたまへる御使(六条院に差し向けなさった御文遣いが)、いたく酔ひ過ぎにければ(祝儀のもてなしに、ひどく酔い過ぎていたので)、すこし憚るべきことども忘れて(六姫からの御返事を持参したのであれば、少しは御方に遠慮すべき作法も忘れて)、けざやかにこの南面に参れり(おおっぴらにこの西の対の南表に参上しました)。

［第五段　後朝の使者と中君の諦観］

*海人の刈るめづらしき玉藻にかづき埋もれたるを(遣いの使者が、刈り取った立派な玉藻まみれの海人のように、源氏殿から下げ渡された美しい衣服を肩に掛けているのを見て)、「*さなめり(後朝の御返事を持ち帰ったらしい)」と、人びと見る(と女房たちは思います)。　*「海人の刈る～」の言い回しに付いては、注に＜夕霧から使者への禄。『花鳥余情』は「何せむにへだのみるめを思ひけむ沖つ玉藻を潜く身にして」（後撰集雑一、一〇九九、大伴黒主）を指摘。「玉裳」「被き」（大島本等）、「海人」「刈る」「玉藻」「潜き」は縁語。＞とある。後撰集の歌は「千人万首」サイトの「大伴黒主(おおとものくろぬし)」のページに解説があって、詞書に＜滋賀県大津市唐崎の神職に仕える「みる」という女がいて、黒主が口説いた時の歌＞とあるようで、歌筋は＜何で私は浜辺のミルメ海草のことを考えていたのだろう、沖の玉藻を潜って取る海人なのに＞で、低い身分の自分が貴人に恋する不相応を嘆いているらしい。「へたのみるめ」は＜波打ち際の海松。女の名を掛ける。＞とある。確かに使者の従者は身分が低いだろうが、貴人でも被け物を頂くことはあるだろうし、此処の文が特にこの歌を下敷きにした言い回しとも思えない。それよりも、「海人の刈る藻」は節が多くて不揃いなのできれいに纏まらないらしく、乱れた形態であることから「思い乱る」を言い出す序詞として語用されるらしいことは、二章九段の「幾世しもあらじを(私も老い先短いので)」という入道宮の言い回しのノートでも見たし、「玉藻刈る」と

詠まれた万葉集歌も多いようで、被け物を頂いた使者を「玉藻にかづき埋もれたる」と言うのは常套句のようなもので、その序詞として「海人の刈るめづらしき」を洒落語用した、と見て良いように思う。　*「さなめり」は＜後朝の文遣いに違いない→六姫の御返事を持ち帰ったらしい＞。

いつのほどに急ぎ書きたまへらむと見るも(宮様はいつのまにか手早くお書きになったようだと思うにも)、やすからずはありけむかし(よほど新婦がお気に入りらしいと、心穏やかではなかったことでしょう)。宮も(宮も今さら)、あながちに隠すべきにはあらねど(無理に隠すのは良くは無かったが)、*さしぐみはなほいとほしきを(急な事ではやはり穏やかでは無いので)、すこしの用意はあれかしと(少しは気を利かせないかと)、かたはらいたけれど(苦々しかったが)、今はかひなければ(もう取り返しがつかないので)、女房して御文とり入れさせたまふ(女房に六姫の御手紙を受け取らせなさいます)。　*「さしぐみは」は＜急では、不意には＞という語感で、不都合な事情にあるという言い方のようだが、分かり難い語だ。

「同じくは(どうせ分かっているのなら)、隔てなきさまにもてなし果ててむ(御方に六姫の事を、隠し立てのない形にしてしまおう)」と思ほして(と宮はお思いになって)、ひき開けたまへるに(御手紙を開きなさると)、「*継母の宮の御手なめり(養母の一条宮の御筆跡らしい)」と見ゆれば(と見えたので)、今すこし心やすくて(御方の手前にも生々しさが薄れて、少し気楽になって)、うち置きたまへり(御方の目にも触れるように、開いたまま前に置きなさいました)。宣旨書きにても、*うしろめたのわざや(しかし代筆とは言え恋文に変わりはないので、御方には落ち着かないものです)。　*「ままははのみや」は注に＜六の君の継母、落葉宮。＞とある。　*「うしろめたのわざや」は、宮が「うち置きたまへ」る手紙を目にした＜御方の不安感＞と読んで置く。

「さかしらは(私が差し出がましくでしゃばるのは)、かたはらいたさに(見っともないので)、そそのかしはべれど(姫に御返事なさるように促し申しましたが)、いと*悩ましげにてなむ(とても混乱しているようで、致し方無く)。　*「なやましげ」は＜体調が悪そう＞という言い方だろうが、昨日の今日でこういう言い方をすれば、風流事とは一味違う情事の生々しさに、姫はまだ自分の心と体の整理が付かない状態で混乱している、だからとても返事が書けない、という事情は、宮なら実感として分かる筈だ、という事なのだろう。

女郎花しをれぞまさる、朝露のいかに置きける名残なるらむ」(和歌 49-08)

朝露に 濡れて萎れた 女郎花」(意訳 49-08)

*注に＜落葉宮の代作。「女郎花」を六の君に、「朝露」を匂宮に譬える。「置き」「起き」の懸詞。「置く」は「露」の縁語。＞とある。相当にイヤラシイ歌だ。「をみなへし」は「女飯(をみなめし)」の異名もあるとのことだが、音感では＜小身萎へし→小さくしぼんでいる＞とも聞こえる。その語感があるから、「萎れぞ増さる」の「増さる」が効果的なのだろう。「朝露のいかに置きける」は＜朝方までの情事でどれだけ姫を相手に宮は射精したのか＞とモロに言っているのに等しい。「名残なるらむ」は＜だから姫がぐったりしているのも分かるでしょ＞と聞こえる。一条宮がこんな女郎屋の女将みたいな歌詠みをするものかと意外だが、現にそうしているのだから、是が普通の和歌の情緒なのだろう。一条宮は薫君の母入道宮の異腹姉で、とは即ち今上帝の異腹姉で、とは即ち匂宮の父方の伯母筋で、とは即ち薫君の母方の伯母筋でもあるが、入道宮がこの年で 47 歳の筈なので、50 歳前後だろうか。因みに、源氏

殿右大臣は52歳、匂宮27歳、対の御方26歳、序でに薫君も26歳、と思われるが、六姫の年齢だけは未だに不明だ。まだ十代かも知れないが、匂宮巻で語られた年立てなどからは二十代でもありそうで、それでも、対の御方よりは若そうだ。

あてやかにをかしく書きたまへり(上品に美しく書いていらっしゃいました)。

「かことがましげなるもわづらはしや(私の所為で姫の具合が悪くなったような言い方は迷惑だな)。まことは、心やすくてしばしはあらむと思ふ世を(本当は、気楽にしばらくは二人で暮らそうと思っていた夫婦生活だが)、思ひの外にもあるかな(意外な事になったものだ)」

などはのたまへど(などと宮は仰るが)、

「また二つとなくて(他に二人目など居なくて)、さるべきものに思ひならひたるただ人の仲こそ(妻は一人なのが当然と思うのが普通の臣下身分の者の夫婦仲であってみれば)、かやうなることの恨めしさなども(こういう重婚の悲しさなども)、見る人苦しくはあれ(先妻に同情する人はいるだろうが)、思へばこれはいと難し(この宮の立場を思えば、それは難しく)、つひにかかるべき御ことなり(いつかはこうなる御事情です)。

宮たちと聞こゆるなかにも(この宮様は皇子の中でも)、筋ことに世人思ひきこえたれば(期待を特に高く多くの人が思い申して)、幾人も幾人も得たまはむことも(何とか縁付けたいと思うので、何人もの妻を娶りなさる事も)、もどきあるまじければ(非難されまじきものなので)、人も、この御方いとほしなども思ひたらぬなるべし(誰も、この御方をお気の毒とも思っていないのでしょう)。かばかりものものしくかしづき据ゑたまひて(宮は御方をこれほど格式高く大事に待遇なさって)、心苦しき方(今回の事での御方への配慮も)、おろかならず思したるをぞ(厚くなさっているのですから)、幸ひおはしける(御方はお幸せです)」

と聞こゆめる(と女房たちは申しているようです)。みづからの心にも(御方自身の気持ちにしても)、あまりにならはしたまうて(宮の御厚情にあまりに慣れていらっしゃって)、にはかにはしたなかるべきが嘆かしきなめり(急に恥を掻かされたようなのが悲しかったのでしょう)。

「*かかる道を(貴人が他の妻を持つ事を)、いかなれば浅からず人の思ふらむと(なんで深刻に女は思うのだろうと)、昔物語などを見るにも(昔話を読んでも)、人の上にても(他人の噂にしても)、あやしく聞き思ひしは(変だと聞き思っていたことは)、げにおろかなるまじきわざなりけり(現に簡単には済まない問題なのだった)」　*「かかる道」は＜ものの道理＞だから＜貴人がその政治的経済的立場から複数の妻を持つこと、の合理性＞なのだろう。

と、わが身になりてぞ、何ごとも思ひ知られたまひける(と御方は、我が身に降り懸ってみて初めて、何事も思い知りなさったのです)。

［第六段　匂宮と六の君の結婚第二夜］

宮は、常よりもあはれに、うちとけたるさまにもてなしたまひて(宮はいつもより優しく、親しい態度で御方に接しなさって)、

「むげにもの参らざなるこそ、いと悪しけれ(何も召し上がらないのは良くないねえ)」

とて、よしある御くだもの召し寄せ(と言って、季節の果物を用意させ)、また、さるべき人召して(また料理名人を呼び寄せて)、ことさらに調ぜさせなどしつつ(特別な献立を作らせたりしては)、そそのかしきこえたまへど(勧めなさったが)、いとはるかにのみ思したれば(御方は全く手を付けず、遠ざけていらっしゃったので)、「見苦しきわざかな(心配なことだ)」と嘆ききこえたまふに(宮は嘆息なさるが)、暮れぬれば、夕つ方、寝殿へ渡りたまひぬ(日が暮れたので、夕方には、六条院にお出掛けなさる準備の為に、寝殿の自室にお帰りなさいました)。

風涼しく、*おほかたの空をかしきころなるに(風が涼しく、いかにも空が秋らしい風情に合わせて)、今めかしきにすすみたまへる御心なれば(宮は目立つべき立場を自負もし好んでもいらっしゃるので)、いとどしく艶なるに(気張って粧かし込むので)、もの思はしき人の御心のうちは(物憂い御方の御心中は)、よろづに忍びがたきことのみぞ多かりける(何につけても涙を誘うことばかりが多いのでした)。　*「おほかたの」は分かり難い。「おほかた」は＜だいたい、およそ、ひととおりだ、普通だ、標準的だ＞で、この日は八月十七日だから「普通だ」は＜如何にも秋らしい＞あたりか。「の」の連体修飾句は「空」ではなく、「空をかしきころ」を形容する、のだろう。

*ひぐらしの鳴く声に、山の蔭のみ恋しくて(御方はヒグラシの鳴く声に、宇治の山里ばかりが恋しくて)、　*注に＜『河海抄』は「ひぐらしの鳴きつるなべに日は暮れぬと思ふは山の蔭にぞありける」（古今集秋上、二〇四、読人しらず）を指摘する。＞とある。この歌は前にも引かれていたかと思うが、例によって、「古今和歌集の部屋」サイトの当該ページを頼ると、「なへに」は「並べに(～と並んで、～と共に)」で、歌筋は＜あたりが薄暗くなって、そこにひぐらしの声が加わると、さすがに秋の日は短く、もう夕暮れになったのかと思うけれど、実際は伸びてきた山の影だった＞と解されている。ヒグラシは夜明け前か夕方の薄暗く涼風が立つ時分に鳴くので＜日暗す→日を暮れさせるセミ＞という事で呼称されているらしいが、この歌では＜ヒグラシ＝日暮らす＝一日中＞の掛詞になっていると同サイトに指摘されていて、「ひぐらしのなきつる」が＜一日中泣き暮らす＞の複意語用となっているらしい。即ち、歌意を汲んで筋を均せば＜ヒグラシが鳴いていたので、もう夕方になったのかと気付き、一日中泣き暮らしてしまったのかと思ったら、此処は山中の木陰なので、まだ日中なのに暗いのだった＞となり、時間が経つのも忘れるほど深く悲しんだが、どんなに思い詰めても自分は小さな存在だと悟って、この難局を乗り越えて行くしかなさそうだ、みたいな歌に見える。特に「ありける」という認識を示す結論付けの語感は印象的だ。だとすると、確かに此処での「山の蔭のみ恋しくて」は＜宇治の山里ばかりが恋しくて＞という言い方だろうが、その底には＜故父宮のように悟りを得て、心静かに暮らしたい＞という心象まで作者は示した心算なのかも知れない。また、「ひぐらしの鳴く声に」には、セミはオスだけが鳴くので、いそいそと着繕う匂宮への皮肉たっぷりで、此処には宮が六姫を＜思ヒクラシ＞という御方の怨みさえ込められているかのようだ。

「おほかたに聞かましものを、ひぐらしの声恨めしき秋の暮かな」（和歌 49-09）

「ヒグラシを 何で鳴かすか 秋の暮」（意訳 49-09）

*注に＜中君の独詠歌。「秋」に「飽き」を掛ける。＞とある。前振りの「おほかたの空をかしきころなるに」が妙に分かり難い言い方で、何で態々こんな言い方をするのかと思ったが、この歌が「おほかたに」で始まるとは、如何にも前振りだ。この「おほかたに」は＜宇治に居たなら普通に（聞けただろうに）＞の意味で、「おほかた」は同じ＜普通だ＞でも、人によって立場によって、何が「普通」なのかは変わるものだ、と作者は言っている心算らしい。ただ、現代語の「大方」は＜大体のところ＞という語用が殆んどなので、古文の「おほかた」の語感はいつも掴み難いという印象が私には強い。

今宵はまだ更けぬに出でたまふなり（宮は今宵はまだ夜更け前にお出掛けなさるのでした）。御前駆の声の（おおんさきのこゑの、人払いの従者の声が）遠くなるままに（遠くなるにつれて）、*海人も釣すばかりになるも（海人が漁をする海ほどに大泣きしてしまうのも）、「我ながら憎き心かな（我ながら見苦しい）」と、思ふ思ふ聞き臥したまへり（と思いつつ遠ざかる宮様の物音を聞きながら臥せってしまいなさいました）。　*「あまもつりすばかり」は注に＜『源氏釈』は「恋せじとねをのみ泣けばしきたへの枕の下に海人ぞ釣する」（出典未詳）を指摘。＞とある。「しきたへのまくら」は、三章一段の「枕の浮きぬべき心地すれば」の言い回しに付いての引用参照歌でも見たので、「敷妙の」が＜妙なる美しさの夜具の＞という言い方で「枕」を言い出す枕詞とは知れるが、「しきたへ」には＜袖を敷き合ふ→共に寝た＞という意味があるかのような詠み方に見えるし、「妙の」は＜怪しくも、不思議なほどに→ただならず＞みたいな語感がありそうだ。ともあれ、「海人ぞ釣する」は＜漁師が漁をする海に成るほど涙が溜まる＞ではあるらしい。しかし、涙に濡れる事を、何故こういう言い方をするのかは分からない。まぁ、海と言うのだから、大泣きなのだろうとは思って置くが、何かもう一段の故事でもありそうで、スッキリしない。

*はじめよりもの思はせたまひしありさまなどを思ひ出づるも（新婚の三日通いに出掛ける匂宮には、御方の三日通いの時にはその後に訪問が長く途絶えて、姉妹共々に物思いさせなさったことなどが思い出されるのも）、疎ましきまでおぼゆ（御方は恨めしい気にさえなります）。　*「はじめより」は、三年前の春の花見に匂宮が宇治へ出掛けてから始まった手紙の遣り取りのこと（椎本巻一章）かとも思ったが、今日は匂宮の源氏六姫との結婚二日目の夜なので、ちょうど二年前くらいの八月末に結ばれた宇治妹姫と匂宮の結婚の時のこと（総角巻三章）を、御方は思い出しているらしい。しかし、馴れ初めが三年前の春であり、同年八月二十日に八宮が亡くなり、翌年の八月末に妹姫と結ばれ、同年十一月に姉君が亡くなった、とは相当な波乱の二年間だったし、姉君の三ヶ月の喪が明けた昨年の二月七日に妹君は二条院に輿入れし（早蕨巻二章）、そのまま一年少しして二条院暮らしに馴れ落ち着いたこの四月中には受精妊娠したらしく（当巻二章二段）、いよいよ腰を落ち着けるかという段になったものの、昨日の八月十六日に匂宮は源氏六姫とも結ばれた（当巻三章一段）、とはこの一年も御方には安穏とはいえない日々が続く。思えば、二年前の匂宮の宇治への三日通いは、立場上も実際の遠路も大変なことだったが、匂宮は強行した。が、母の明石中宮を初め、父帝までも匂宮の宇治通いを諌めるに至っては、その後の宇治通いは難しかった（総角巻五章）。止む無く稀稀の宇治訪問とはなったようだが、匂宮は気晴らしに召し人を可愛がっていて、それらしい疎外感を妹君も感じていたらしい節はあった（総角巻六章）。そうこうする内に姉君が亡くなるという不幸があったので（同上）、その辺の怨みを「ありさま」として思い出しているようだ。

「*この悩ましきことも、いかならむとすらむ（この妊娠もどうなることやら）。いみじく命短き*族なれば（非常に短命な家系なので）、かやうならむついでにもやと、はかなくなりなむとすらむ（この事で私は死ぬかも知れない）」　*「この悩ましきこと」は注に＜以下「はかなくなりなむとすらむ」まで、中君の心中。妊娠の身を心配。＞とある。　*「族（ぞう）」は注に＜短命な一族。母は出産直後に死去、大君も若くして死去。母方の系図によっていう。＞とある。

と思ふには(と思う分には)、「惜しからねど、悲しくもあり(惜しい命ではないが、悲しい定めだし)、またいと罪深くもあなるものを(母無し児を残して逝くのは、とても罪深いだろう)」など、まどろまれぬままに思ひ明かしたまふ(などと御方は一睡も出来ずに考えて夜を明かしなさいます)。

[第七段　匂宮と六の君の結婚第三夜の宴]

その日は(そして明けた匂宮の結婚三日目の日は)、后の宮悩ましげにおはしますとて(皇后が体調が悪そうでいらっしゃるという事で)、誰も誰も、参りたまへれど(高官たちは誰もが御見舞に参内なさったが)、御風邪におはしましければ、ことなることもおはしまさずとて、大臣は昼まかでたまひにけり(お風邪でいらっしゃって大事無いと言う事で源氏大臣は昼に下宮なさいました)。中納言の君誘ひきこえたまひて、一つ御車にてぞ出でたまひにける(中納言の薫君を誘いなさって、同じ御車に同乗して六条院に下がりなさいました)。

「*今宵の儀式(今宵の三の宮の結婚披露宴は)、いかならむ(どうしたものか)。きよらを尽くさむ(最上のものにしたい)」と思すべかめれど(と源大臣はお思いのようだが)、*限りあらむかし(この上なくとは行かないようです)。　*「こよひのぎしき」とは、六姫の結婚三日目の内々の披露宴ということらしい。三日通いが成婚の記しとなる習わしにあって、その三日目の夜は実質での成婚記念日であり、新婦側一族の主だった面々に婿を身内に迎える御披露目の祝宴を催す、ということのようだ。一般的な披露宴の意味はそういう身内事だろうが、大臣家が皇子を婿に迎えるというのは、相当に重要な政治事情に違いない。それが、六条院内の私事で済む、という事の凄みに圧倒的な源氏殿の権勢が現れているのだろう。　*「限りあらむ」は具体意が分からないので一般語用なのだろう。「限りなし」の対語で＜この上なくとは行かない＞みたいな。「かし」は＜かも知れない＞という遠回しの否定。

この君も(この薫君にしてみても)、*心恥づかしけれど(六姫の縁談では気まずかったが)、親しき方のおぼえは(近親者という点では)、わが方ざまにまたさるべき人もおはせず(源氏家筋には他に相応しい列席者もいらっしゃらず)、ものの栄にせむに(場の華やぎに於いては)、心ことにおはする人なればなめりかし(薫君は特に印象的でいらっしゃる方であればこその、同道のお誘いだったようです)。　*「心恥づかし」は＜気恥ずかしい→気まずい＞。以前から源氏殿にとって、薫君は弟君ながら入道宮の御子であり、気性も物静かなので取っ付き難い、という記事はあった。が、内祝いの披露宴に薫君を誘う際に、そういう一般的な意味に於いて＜気まずい＞という文意は、だからどうだと語るに足らぬ事情であり、実際に当文に語られているように、薫君が列席者に相応しいのは近親縁者である事で十分なので、此処で「心恥づかし」を言う作者の意図が掴み難かった。が、何のことはない、下文に「人の上に見なしたるを口惜しとも思ひたらず」とあって、六姫の結婚相手が薫君ではなく匂宮であることに、薫君が頓着していないことが、源氏殿には不満だった、ということなので、六姫の縁談を薫君に持ち掛けて断わられたことにシコリがあってバツが悪い、という具体意のある＜気まずさ＞のことらしい。

例ならずいそがしく*参でたまひて(薫中納言はいつになく、自室で身支度を急いで整えて夏の町の寝殿に参上なさって)、*人の上に見なしたるを口惜しとも思ひたらず(六姫が匂宮の妻になったのを残念とも思うこと無く)、何やかやと*もろ心に扱ひたまへるを(何かと一緒になって式場の準備を手伝いなさるのを)、大臣は、人知れずなまねたしと思しけり(源大臣は内心半ば憎ら

しくお思いでした)。　*「までたまひて」の主語は薫君らしい。　*「人の上に見なしたる」は＜この披露宴を他人事として考える→六姫が匂宮の妻となる事に平気でいる＞。　*「もろごころに」は＜薫君が源氏殿と一緒に＞。

*宵すこし過ぐるほどにおはしましたり(夜の八時過ぎくらいに匂宮が六条院にお着きなさいました)。　*「よひ」は、日没して暗くなってから寝入るまでの時間、みたいな言い方なのだろう。昔は季節によって相当違ったのだろうが、今の感覚では大体 19：00〜21：00 で、陰暦の八月十七夜とは今の九月末から十月初めくらいは、もう少し早くなるかも知れないが、「すこし過ぐるほど」はやはり＜夜の八時過ぎ＞あたりになりそうだ。また、「おはしましたり」は宮が＜式場においでになった。のではなく＜六条院にお着きになった＞という意味で、宮はそのまま六姫の部屋に入っているらしい。この辺の語感は、「おはします」の語意なのか、当時の生活慣習に基づく自明の言い回しなのかは、私には良く分からない。注には＜結婚三日目の夜の儀式。『花鳥余情』は、『李部王記』天暦二年十一月二十二、二十四日条の重明親王の右大臣藤原師輔娘との結婚を準拠として指摘。＞とある。訳の分からない注釈だが、どうやら以下の式事描写がその史実資料を下敷きに書かれている、という意味らしい。と言っても私などは、へェーそうなんだ、と思うしかないし、思ったところでそれ以上何の広がりも得られないが、物識りにはそういう楽しみ方も有るのかと感心するばかりだ。

寝殿の南の廂、東に寄りて御座参れり(寝殿南廂の中央東側に婿宮の御席が用意されていました)。*御台八つ(八つの御膳に)、例の御皿など(恒例の婚礼料理の皿が)、うるはしげにきよらにて(洩れなく整然と並べられ)、また(その他には)、小さき台二つに(小さな高脚台二つに)、*花足の皿なども(花足付きの小皿を)、今めかしくせさせたまひて(今風に飾り付けて)、餅参らせたまへり(祝餅を供え申していらっしゃいました)。めづらしからぬこと書きおくこそ憎けれ(こうした決まりきった様式次第を、これ以上書き置くのは話の邪魔でしょう)。　*「御台(みだい)」は脚付きの角盆御膳らしいが、「八つ(やつ)」とあるのは、宮の御膳なのだから八種類の恒例の婚礼料理が皿に盛り付けられていた、という意味なのだろう。こういう説明は実際の次第を知っている人にとっては確認程度の意味だろうから、簡素な表現で伝わるのだろうが、私のような世間知らずには凡そ分かり難い。というのに、子細は省く、と念押しが明示されている。トホホもんだ。かといって、有職故実の現存資料に基づいてその献立の一部始終を具に説明されても、其等の料理が現在のものと異なれば、同じなら同じでもだが、その理解にまた手間が掛かるという煩わしさで、そういう意味では＜煩く＞、作者の意図とは別に確かに「憎し」ということではあるものの、そういう具体的な式次第こそが社会の豊かさや文化の歴史の具現そのものであり、当時の読者が知り得たこの話の実感に迫るには、そうした手間が現代の読者には必要に思える。が、私に其処までの根気はない。是等に付いては、きっと適任者が居る筈なので、適格な解説が期待されるし、もう既にその研究結果も何処かで示されているのかも知れないが、今が今は、それを調べることさえ億劫だ。　*「けそくのさら」は＜飾り脚付きの陶器小皿＞らしい。

*大臣(おとど、源氏殿が)渡りたまひて(婿宮の休んでいらっしゃる姫の部屋の前にいらっしゃって)、「夜いたう更けぬ(夜もだいぶ更けた)」と、女房してそそのかし申したまへど(と女房をして、そろそろお出ましをと催促申しなさったが)、いとあざれて(宮は姫とすっかり戯れて)、とみにも出でたまはず(直ぐには出ていらっしゃいません)。　*「大臣渡りたまひて」は、源氏殿が自ら出向いた、と言う事のようだが、是は宮に対する敬意か、自宅の気軽さか、良く分からない。

*北の方の御はらからの*左衛門督、藤宰相などばかりものしたまふ(南廂の祝宴会場では、正夫人の藤原三条殿の御弟君の左衛門督や藤原参議などの身内縁者だけが招かれた列席者として着座していらっしゃいます)。からうして出でたまへる御さま(やっと出ていらっしゃった婿宮の

御姿は)、いと見るかひある心地す(実に見応えのある美しい新郎ぶりでした)。*主人の頭中将、盃ささげて御台参る(主催源氏家の頭の中将が宮に酒を注いで御膳を勧め申します)。次々の御土器、二度、三度参りたまふ(宮は列席者からの次々の祝杯を二度三度とお飲みになります)。中納言のいたく勧めたまへるに(薫君が何杯も飲ませなさるので)、宮すこしほほ笑みたまへり(宮は少し苦笑なさいました)。 *「北の方」は注に＜夕霧の北の方、すなわち雲居雁の兄弟たち。父は致仕太政大臣、母は按察大納言に再婚した。＞とある。藤原家としては妾腹娘だったが、幼くして藤原家に引き取られ、大宮に育てられたことで高い地位を得た。明石中宮に似た事情だが、王家と摂関家とでは厳然とした身分差はあるようだ。源氏殿 52 歳、北の方藤原三条殿 54 歳。 *「さゑもんのかみ」は左の衛門府の長官で、注に＜従四位下相当＞とある。三男だろうか。であれば、源氏殿よりは少し年上だ。「とうさいしゃう」は注に＜参議で正四位下相当＞とある。四男だろうか。であれば、源氏殿と同じ年くらい。 *「あるじのとうのちゅうじゃう」は注に＜夕霧の子息＞とある。長男だろうか。源氏殿と三条殿の正式な結婚は源氏殿 18 歳の四月七日(藤裏葉巻一章六段)だったので、二人は結婚 34 年目だろうから、長男なら 32,3 歳あたりで、匂宮や薫君よりは少し年上だ。この人物は、竹河巻一章三段に「右の大殿の蔵人少将とかいひしは (源右大臣の子息の蔵人少将とかいう者は) 、三条殿の御腹にて(三条藤原殿正妻腹の御子で)、兄君たちよりも引き越し(藤典侍妾腹別腹の兄君たちを追い越して出世し)、いみじうかしづきたまひ(両親がとても大事になさり)、人柄もいとをかしかりし(性格もとても陽気だった)」と語られた蔵人少将と同一人物だろうか。その蔵人少将は、竹河巻末の五章四段では「左の大殿の宰相中将～(中略)～二十七、八のほどの、いと盛りに匂ひ、はなやかなる容貌したまへり」と語られていた。今からは二年前の記事になるので符合する。

「*わづらはしきわたりを(肩身の狭い親戚付き合いになる伯父大臣の娘を、娶るのは気が進まない)」と(と宮は)、ふさはしからず思ひて言ひしを(自分には相応しくない結婚だと思って中納言に話した事を)、思し出づるなめり(思い出しなさったようです)。されど、見知らぬやうにて、いとまめなり(しかし中納言は知らん顔をして、至って堅苦しく儀礼を尽くします)。 *「わづらはしきわたり」は匂宮が源氏殿を煙たく思っていることから、その源氏家の娘が＜面倒な家の姫＞であり、その姫を娶れば源氏殿が＜面倒な舅＞になるという関係性を言っているのだろうし、そういう匂宮の意向は確かに示されて来ていたようにも思うし、匂宮が薫君にそういう話をしたことは多分あるのだろうという気はするが、そういう場面自体が描写された段幕は、少し探した限りでは見当たらなかった。ただ、小学館の日本古典文学全集では、この「わづらはしきわたり」の引用元として、当巻一章五段の「ただ、いとことうるはしげなるあたりにとり籠められて、心やすくならひたまへるありさまの所狭からむことを、なま苦しく思すに」という文を指摘しているようだ。確かに、この文は匂宮が六姫との縁談に気が進まない事情を説明してはいるが、文体は語り手の客観判断であり、むしろ匂宮が源氏殿に頭が上がらない立場を愚痴っていたのは、椎本巻五章三段の≪大殿の六の君を思し入れぬこと、なま恨めしげに、大臣も思したりけり。されど、「ゆかしげなき仲らひなるうちにも、大臣のことことしくわづらはしくて、何ごとの紛れをも見とがめられむがむつかしき」と、下にはのたまひて、すまひたまふ。≫という記事かと思う。で、この椎本巻の記事の「下にはのたまひて」を＜内心を側近女房には仰って＞と以前は読んでいたのだが、此処の文から逆推すると、この「下にはのたまひて」は＜こっそりと薫君には仰って＞という事だったのかと思えてくる。だとすれば、此処の文の引用元は、丸々椎本巻の上掲部分になりそうだ。

東の対に出でたまひて(そして東の対に出向きなさって)、御供の人びともてはやしたまふ(宮の供人の接待をなさいます)。おぼえある殿上人どもいと多かり(顔見知りの管理職役人が多く居ました)。四位六人は、女の装束に細長添へて(四位の六人への引出物は女装束の一揃いに細長を加えて)、五位十人は、*三重襲の唐衣、裳の腰も皆けぢめあるべし(五位の十人には三重袷の唐

衣で裳の腰紐は皆身分相当の決まりに従っています)。六位四人は、綾の細長、袴など(六位の四人には綾織の細長に袴などです)。*かつは、限りあることを飽かず思しければ(源氏殿はせめて、臣下の婚礼での引出物に上記のような制限がある事を飽き足らずにお思いになったので)、ものの色、しざまなどをぞ、きよらを尽くしたまへりける(其等の質や仕立てなどに豪勢を尽くしていらっしゃいました)。　*「三重襲(みへがさね)」は＜裏と表との間に中陪(なかべ)を入れて仕立てた衣服。＞と大辞泉にある。「唐衣(からぎぬ)」は＜平安時代、十二単(じゅうにひとえ)のいちばん上に着る丈の短い衣。前は袖丈の長さで後ろはそれよりも短く、袖幅は狭く、綾・錦(にしき)・二重織物で仕立て、裳(も)とともにつけて一具とする。唐の御衣(おんぞ)。＞とある。「裳の腰(ものこし)」は＜裳の紐(ひも)。裳の腰に付いている飾りの紐。大腰・小腰・引腰(ひきごし)・懸帯(かけおび)など。＞とある。風俗博物館サイトの日本服飾史資料の「公家女房晴れの装い」の画像と説明で何となく思い描いてみるが、実感は湧かない。他の「女の装束」も「細長」も言葉だけが流れる。　*「かつは」は＜また一方では＝それと同時に他方では＞で、上記の説明が臣下の婚礼様式として決められた「限りあること」ということ＜ではあるものの、せめて＞という意味合いの語用らしく、主語は源氏殿のようだ。

*召次(宮の下僕や)、舎人などの中には(馬引きなどの中には)、*乱りがはしきまでいかめしくなむありける(分不相応なほど立派な祝儀に与る者もあったのです)。げに、かくにぎははしくはなやかなることは、見るかひあれば、物語などに、まづ言ひたてたるにやあらむ(実にこの祝儀の、このように賑わしく華やかなことは見応えのあるものなので、女房連中は物の語り草に直ぐ言い立てたに違い有りません)。されど、詳しくはえぞ数へ立てざりけるとや(しかし、実際の所はとても詳しくはその一つ一つを数え上げられなかったようです)。　*「めしつぎとなりなど」は注に＜召次は院や親王家に仕える下人、舎人は馬を扱う下人。＞とある。　*「みだりがはし」は＜秩序を乱しそう→分不相応なほどに＞。